

研 究 報 告

中学生の「命の大切さ」に対する意識
—助産師が行う性教育による考察—

高谷 鼓, 植野 千尋, 八重樫 明子

The Awareness toward the Importance of One's Life
among Junior High School Students
—Effects of Sex Education by Midwives—

TAKAYA Tsudumi, UENO Chihiro, YAEGASHI Akiko

キーワード：命の大切さ、助産師、性教育

Key Words : the importance of one's life, midwife, the sex education

Abstract

In recent years, public concern has been aroused over junior high school students' lack of awareness toward the importance of one's life. So we intended to find out what effects we midwives would have upon junior high school students if we directly spoke to them about the importance of one's life.

We taught a class of sex education at a junior high school and later did a survey of the students' awareness toward the importance of one's life. The result shows that the class helped the students to have an increased awareness toward the importance of their lives and have higher self-esteem. This suggests that midwives, who work daily with new births, are capable of communicating to the students about the reality and emotions regarding childbirth and its significance. However, because of criticism against sex education and a tight curriculum, it is difficult for midwives to get involved and relate to students who have negative impression about the pain of birth.

It is necessary from now on to build a cooperative relationship among midwives, public health nurses, school teachers and parents. It is also necessary to clarify how responses differ depending on the sex.

要旨

近年、若者の「命の大切さ」に対する意識が薄れていることが懸念されており、助産師が直接命の大切さを問いかけることは、中学生の「命の大切さ」に対する意識にどのような影響を与えるかを明らかにしたいと考えた。そこで助産師が性教育を行い、「命の大切さ」に対する意識に関する質問紙調査を実施した。そ

の結果、授業を受けたことで自分の命の大切さを認識し、自己肯定感が高まった。これは日々生命誕生の場にいる助産師だからこそ、生徒に対して臨場感のある現実やその感動を伝え、そのすばらしさを伝えられたといえる。しかし、性教育バッシングや余裕のない授業枠のため、積極的に介入できない現状や、マイナスイメージをもった生徒へのフォローが困難な状況があることが研究の限界である。今後の課題として、助産師・保健師・学校教諭・家庭が連携することの必要性や、性差による具体的な受け止め方の違いを明らかにすることがあげられる。

I. 序論

近年、性情報の氾濫により性の若年化が進行している。若年者の人工妊娠中絶件数や性感染症の罹患率は年々増加の傾向にある。厚生労働省「保健・衛生行政業務報告」によると20歳未満の人工妊娠中絶件数は年々増加し、平成15年には約4万件にのぼっている(財団法人厚生統計協会, 2005, p.94)。また、思春期の若者が殺人を犯したり、自殺する等の事件が取りざたされ、「命の大切さ」に対する意識が薄れていることが懸念されている。

思春期は自分の身体を認識し性を受け入れ、自分をコントロールする能力を身につける大切な時期である。この時期に自分のからだは自分で守り適切な保健行動がとれるように、性に関する健康教育を行うことが必要である(森, 2004, p.150)。

思春期における最も身近な教育の場は学校であり、学校内での性教育は教員が担当していることが多い。しかし、性教育を含め女性のマタニティーサイクルにかかわり、生命誕生の場にいる助産師が学校へ出向いて介入してほしいという教員の声も少なくない。近年、全国において助産師による性教育の取り組みが広がりつつある。今回、市の思春期健康教育事業として性教育授業の充実のために助産師講話の依頼が当院に寄せられた。助産師はいくつもの出産を直接介助し、一人ひとりのかけがえのない命の大切さ、命の誕生の喜びを日々の実践のなかで感じ、誰もが幸せになってほしいと願っている。そんな助産師が直接命の大切さを問いかけることは、性に対する興味が多感な思春期の若者にとって命の尊さを再認識する機会となり、さらに知識不足による望まない妊娠や性感染症の増加を食い止める第一歩となると考える。

そこで助産師が性教育を行う前後で中学生の「命の大切さ」に対する意識の変化を明らかにするために本研究を行った。

II. 研究目的

助産師が行う性教育前後で中学生の「命の大切さ」

に対する意識の変化を明らかにする。

III. 用語の定義

「命の大切さ」：自分自身および家族や周囲の命をかけたがえのないものとしてとらえる気持ち

IV. 研究方法

A. 対象者：中学2年生。男子46名、女子41名、計87名。

B. 日時：平成19年10月下旬13：20～14：10。対象中学校体育館にて。

C. データ収集方法：授業前後の質問紙調査で対象者の「命の大切さ」に関する意識を把握した。授業中の様子をビデオで撮影し観察、分析した。

事前アンケートは授業の1週間前に担当教員に配布してもらい、教員が回収したものを保健師経由で後日受け取った。事後アンケートは授業後その場で配布し、記入が終わりしだい回収した。

D. 質問紙の内容：半構成的質問紙法、自由記載。

E. 分析方法：授業中の生徒の様子をビデオで撮影したものから観察、分析した。質問紙の各項目は単純集計し、自由記載はKJ法を用いて内容の分析をした。

F. 授業内容：研究者が資料や媒体を用いて講義形式で50分間行った。学校で行われている性教育の授業内容を確認したうえで、命の誕生の場面に直接かかわる助産師として伝えられる臨場感を活かした内容を計画した。授業計画は学校長・教頭・養護教諭および市の担当保健師に確認と許可を得て、リハーサルを行ってから授業に臨んだ。

G. 授業目的：生命誕生の場面について知ることを通して命を大切にしたい気持ちが高まる。

H. 授業の流れ：下記の小項目に沿って授業を展開した。

『自己紹介「助産師」について』→『男女の性差と妊娠成立のしくみ』→『受精卵から10カ月までの胎児の成長について』→『分娩の流れと分娩ビデオ』→『カンガルーケアについてとカンガルーケアの写真』→『出産を終えたお母さんたちからのメッセージ』

V. 研究における倫理的配慮

A. 研究の対象とする個人の人権擁護への対策

1. 質問紙への記入は無記名とし、対象者のプライバシーの確保を図った。
2. 記入した内容は研究の目的以外では使用しないことを説明し、個人情報の遵守を図った。
3. 質問紙への記入は強制ではないことを説明し、人権の擁護を図った。

B. 対象者に理解を求め同意を得る方法

同意を得るが署名は求めなかった。質問紙に上記内容を記載した文書を添付し、質問紙に回答したことを以て同意を得たものとした。

C. 対象者が未成年者であることへの配慮

研究の同意については、個人情報保護される内容であれば、学校側の判断に委ねるという助言を教育委員会より受けた。研究の趣旨・協力の内容および倫理的配慮について学校長・教頭および養護教諭に文書・口頭で説明をし、同意を得た。学校側から保護者へ、授業内容と研究の実施についての文書による周知を依頼した。

D. 研究によって対象者に生じる危険と不快に対する配慮

1. 質問紙を書くことによる時間的負担があった：質問紙の枚数および項目数は必要最小限とし、対象者の年齢を考慮した答えやすい内容とした（事前アンケート1枚、所要時間約5分。事後アンケート2枚、所要時間約10分）。
2. 質問紙に記入した内容や記入しなかったことによる成績への影響があるのではないかという不安を招く恐れがあった：質問紙に記入した内容や記入しなかったことによる成績への影響はないことを説明した。
3. 研究により、対象者に上記のような負担・不安が生じる可能性が考えられるが、研究者が実施する授業により学び得ることのできる知識があり、自己肯定感が高まることが期待され、利益と不利益のバランスはとれていると考えた。

VI. 結果

A. 授業中の様子をビデオ撮影し観察、分析した結果 生徒が授業を受けている様子をビデオ撮影したもの

を観察すると、終始雑談する様子もなく、集中して授業を受けていた。

胎児の成長について説明した場面では、胎児の大きさを表現するのに体の一部分やペットボトルなどの身の回りの物のわかりやすい例を写真で示したことで、生徒は自分の体と照らし合わせてみたりするなどの動作があった。

カンガルーケアを紹介する場面では、双子や三つ子の写真を示したが、身を乗り出して驚いたような表情をしている生徒の姿があった。

分娩ビデオを観ている際の様子では、女子は比較的落ち着いて観ていたのに対して、男子は分娩ビデオの前には大きな動きがなかったのに、ビデオの放映中は姿勢を変えたり足を組み直したり少しだけ目をそらしたりするなどの、そわそわして落ち着かない様子があった。

B. 質問紙の分析結果

1. 質問紙の各項目の単純集計結果

質問紙の回収率は100%だった。授業の関心について問う設問では、全体では87名中77名(88.5%)の生徒が「とても関心が持てた」「やや関心が持てた」と答えており、授業に対する関心が高かった。また女子のほうでは、「とても関心が持てた」「やや関心が持てた」と41名中41名(100%)の生徒が答えたのに対し、男子では46名中36名(78.3%)であり、女子のほうに関心が高かった。

「性」に関するイメージについて問う設問では、複数回答で「いやらしい感じ」と答えた生徒は事前で87名中13名(14.9%)であったが、事後では87名中3名(3.4%)であった。「はずかしい感じ」と答えた生徒は事前で87名中12名(13.8%)であったが、事後では87名中6名(6.9%)であった。「かくすべきこと」と答えた生徒は87名中5名(5.7%)であったが、事後では87名中2名(2.3%)であった。また、「生命誕生に関わる大切なこと」と答えた生徒は事前で87名中41名(47.1%)であったが、事後では87名中70名(80.5%)であった。最後に「男女の関わりにおいて重要なこと」と答えた生徒は事前で87名中18名(20.7%)であったが、事後では87名中16名(18.4%)であった(図1)。

「命の誕生」に関するイメージについて問う設問では、複数回答で「うれしい」と答えた生徒は事前で87名中23名(26.4%)であったが、事後では87名中27名(31%)であった。「すばらしい」というイメージをもつ生徒が事前では87名中26名(29.9%)であったが、事後では87名中44名(50.6%)であった。また、「感

動的」と答えた生徒は事前では87名中29名（33.3%）であったが、事後では87名中57名（65.6%）であった。「お父さんとお母さんの愛の結晶」と答えた生徒は事前では87名中5名（5.7%）であったが、事後では87名中12名（13.8%）であった。また、「何とも思わない」と答えた生徒は事前で87名中10名（11.5%）であったが、事後では87名中4名（4.6%）であった。最後に「まだ自分とは関係がない」と答えた生徒は事前で87名中12名（13.8%）であったが、事後では87名中9名（10.3%）であった（図2）。

性別で比較してみると、「命の誕生」に関するイメージについて問う設問のなかで、「うれしい」「すばらしい」「感動的」「まだ自分とは関係がない」については、事前事後における回答数に性別での著しい差はみられ

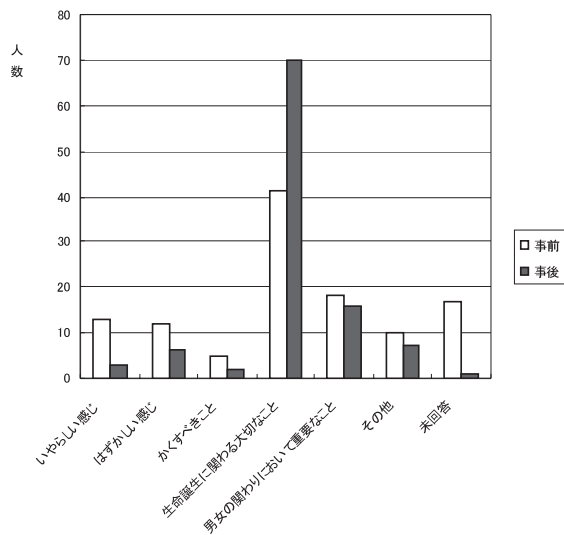


図1. 「性」に関してどのようなイメージをもっていますか

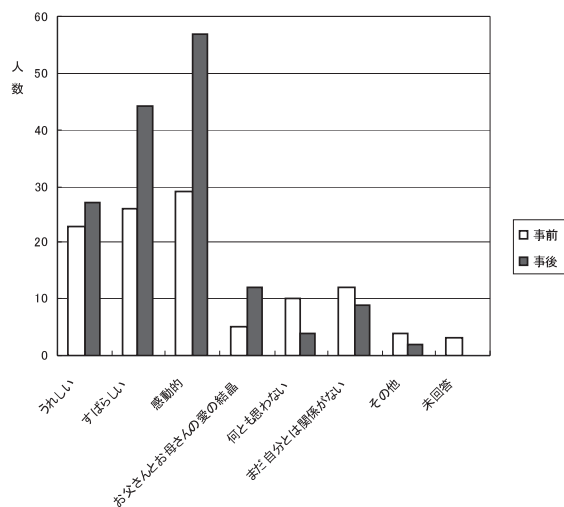


図2. 「命の誕生」についてどんな風に思っていますか

なかった。しかし、「お父さんとお母さんの愛の結晶」と、「何とも思わない」については、男女の差が特徴的に現れていた。女子で「お父さんとお母さんの愛の結晶」と答えた生徒が事前では41名中4名（9.7%）であったが、事後で41名中6名（14.6%）であったのに対し、男子で「お父さんとお母さんの愛の結晶」と答えた生徒が事前では46名中1名（2.1%）であったが、事後では46名中6名（13.0%）であった（図3）。また、女子で「何とも思わない」と答えた生徒が事前では41名中3名（7.3%）いたが、事後で41名中0名であったのに対し、男子で「何とも思わない」と答えた生徒が事前では46名中7名（15.2%）であったが、事後では46名中4名（10.0%）であった（図4）。

「自分という存在」についてどう思っているかを問

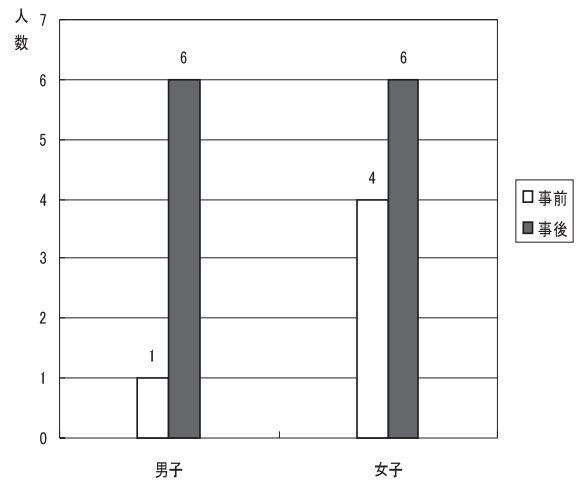


図3. 「命の誕生」に関するイメージ（お父さんとお母さんの愛の結晶と答えた生徒の数）

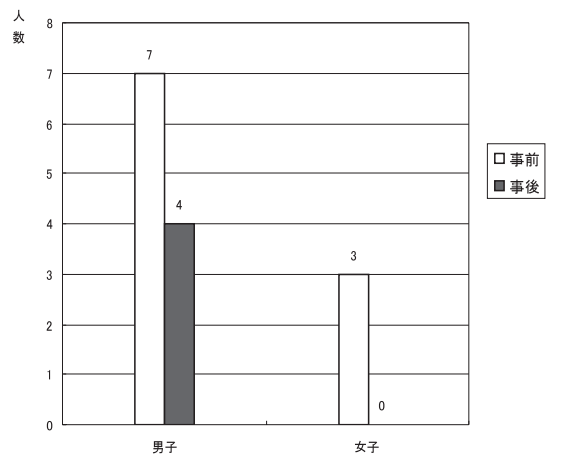


図4. 「命の誕生」に関するイメージ（何とも思わないと答えた生徒の数）

う設問では、複数回答で、「かけがえのない存在」と答えた生徒が事前では87名中3名(3.4%)であったが、事後では87名中7名(8.0%)であった。「よくわからない」と答えた生徒は事前で87名中42名(48.3%)であったが、事後では87名中36名(41.4%)であった。「大切な存在」と答えた生徒は、事前で87名中4名(4.6%)であったが、事後では87名中7名(8.0%)であった。「まだまだ未熟」と答えた生徒は87名中27名(31.0%)であったが、事後では87名中36名(41.4%)であった。性別でみると、女子で「まだまだ未熟」と答えた生徒が41名中10名(24.4%)であったが、事後では41名中14名(34.1%)であったのに対し、男子で「まだまだ未熟」と答えた生徒は事前で46名中27名(58.7%)であったが、事後では46名中36名(78.3%)であった。「まわりから愛されている」と答えた生徒は事前では87名中2名(2.3%)であったが、事後では87名3名(3.4%)であった(図5)。

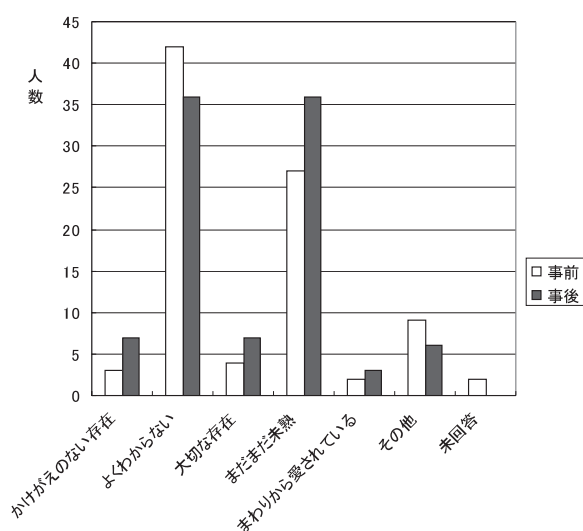


図5. 「自分という存在」についてどんな風に思っていますか

2. KJ法による質問紙の自由記載内容の分析結果

以下にラベル、サブカテゴリー、カテゴリーを記載するが、その記号は順に「**」**、『**」**、【**」**とする。

自由記載の感想文を抜粋し、それぞれの文章を意味上の文節に区切ってラベルに転記したところ、291枚のラベルが抽出された。これらのラベルを分類した結果、「妊娠」「できかた」などから成る『妊娠』、「妊婦さん」「10か月も育てる」などから成る『妊婦』、「生む」「無事に生まれる」などから成る『出産』、「生んだ後」「育てる」などから成る『育児』、「赤ちゃん」「お腹の中」などから成る『赤ちゃん』、「授業」「今日の話」「スライドショー」「学べた」などから成る『授業』の6つのサブカテゴリーに分類された。また、

これらは【授業を受けて知ったこと】というカテゴリーに統合された。

また、「男には分からないこと」「男には耐えられない」「女性」などから成る『性差』、「大切」「とてもうれしい」「感動」「大事にする」などから成る『プラスの感情』、「難しい」「とても大変」「とても痛い」「辛そうだった」などから成る『マイナスの感情』、「責任重大」「私が赤ちゃんを生むとき」「思い出す」「努力」などから成る『将来』、「自分」「未熟」から成る『自分』の5つのサブカテゴリーに分類された。そして、これらは【自分のことを振り返ったこと】というカテゴリーに統合された。

また、「仕事」から成る『仕事』、「助産師さん」から成る『助産師』の2つのサブカテゴリーに分類された。そして、これらは【助産師の仕事を知ったこと】というカテゴリーに統合された。

また、「命はとても大切」「生命のこと」「命の尊さ」「私の周りの命」などから成る『命は大切なもの』の1つのサブカテゴリーは、【自分・他者の命の大切さを認識したこと】というカテゴリーに統合された。

また、「両親の苦勞」「感謝」などから成る『親への感情』、「お母さん」「メッセージ」などから成る『親の存在』の2つのサブカテゴリーに分類された。そして、これらは【親への思い】というカテゴリーに統合された(表1)。

これらのカテゴリーの関係性を留意したうえで線で結び、「助産師が行う性教育を受けて中学生が命について考えたこと」として、図6のような関連図を作成した。

生徒は授業を受けたことにより命の誕生する場面には助産師という存在がいることを知り、より現実的な妊娠・出産をイメージすることにつながった。出産には長い陣痛の痛みを乗り越えなければならないという現実を知り「自分には耐えられなさそう」「生むとき辛そうだった」など、マイナスの感情をいただいた生徒もあった。

関連図(図6)から、生徒にとって今回の授業は自分の命や親への思いを考え、「命の大切さ」を認識し命について考えるきっかけとなったことがわかる。

VII. 考察

A. 授業後の生徒の意識の変化

授業の感想を問う自由記載の内容を分析すると、授業を受けたことで自分のことをふり振り返り、自分の命の大切さを認識することができたとわかる。さらに自分のルーツを知ったことから母親への感謝や両親の苦勞

表1. 質問紙の自由記載内容のカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー	ラベル(一部抜粋)
授業を受けて知ったこと	妊娠 妊婦 出産 育児 赤ちゃん 授業	「妊娠」、「できた」 「妊婦さん」、「10ヶ月も育てる」 「生む」、「無事に生まれる」 「生んだ後」、「育てる」 「赤ちゃん」、「お腹の中」 「授業」、「今日の話」、「スライドショー」、「学べた」
自分のことを振り返ったこと	性差 プラスの感情 マイナスの感情 将来 自分	「男には分からないこと」、「男には耐えられない」、「女性」 「大切」、「とてもうれしい」、「感動」、「大事にする」 「難しい」、「とても大変」、「とても痛い」、「辛そうだった」 「責任重大」、「私が赤ちゃんを生むとき」、「思い出す」、「努力」 「自分」、「未熟」
助産師の仕事を知ったこと	仕事 助産師	「仕事」 「助産師さん」
自分・他者の命の大切さを認識したこと	命は大切なもの	「命はとても大切」、「生命のこと」、「命の尊さ」、「私の周りの命」
親への思い	親への感情 親の存在	「両親の苦労」、「感謝」 「お母さん」、「メッセージ」

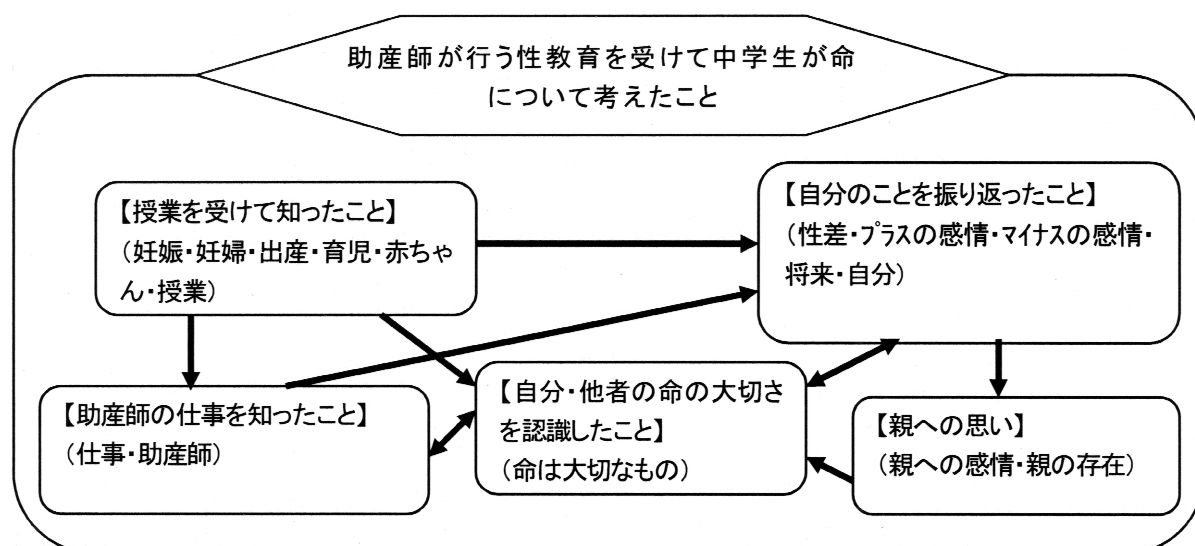


図6. 質問紙の自由記載内容をKJ法により分析した関連図

を感じることにまで発展し、自分の命は待ち望まれて生まれてきたのだという自己肯定感にもつながった。このことから、授業目的は達成されたと評価できる。

また、「自分という存在」を「まだまだ未熟」と答えた生徒が多く、授業後は男女ともに増えていることから、自分自身を考え直す機会となっただけでなく、今の自分を再確認する場になったと推測される。

「命の誕生」についての思いを問う設問では、授業後、男子の「何とも思わない」に答えた生徒数が減り「お父さんとお母さんの愛の結晶」と答えた生徒数が増えた。このことから授業を受けたことによって「命の誕生」が男の自分とは関係のないことではなく、自分が父親となるときに関係のあることとしてとらえることができるようになったと示唆された。しかし、全体的に女子の関心が高く、出産ビデオを観ている際に

落ち着いた観ている女子に対して、そわそわしている男子の様子があった。このことから女子のほうが将来の自分と重ね合わせ、妊娠・出産を自分のこととしてイメージし受け止めやすいと考えられ、男女一貫した内容の授業だけでなくレディネスや性差を意識した授業形態も重要であり見直す必要もある。

性について「男女の関わりにおいて重要なこと」と答えた生徒が授業後に減少したが、これは男女の関わりという意識が薄れたのではなく、今回は生命の誕生を中心とした授業内容としたために、「生命誕生に関わる大切なこと」という強い印象をもたらしたためであると推測される。

今後継続して授業を行っていく場合、こういった生徒の授業前後での意識の変化をとらえることや、どんな内容を授業に取り入れてほしいかという要望を考慮

しながら授業内容を検討していくことが、生徒の関心を引き効果的な授業を計画する手だてとして有効になると考える。

授業の感想では「自分には耐えられなさそう」「生むとき辛そうだった」といった出産に関する痛み・苦痛について強く印象に残った生徒も少なくなかった。マイナスイメージをもった生徒に対しては1回の授業だけでフォローするのは困難であり、個人の感想にとどめずクラス全体でディスカッションし、担任教師や助産師の思いもさらに伝えることが大切である。

B. 助産師が性教育を行うことの意義

近年若年者の望まない妊娠による人工妊娠中絶の増加、殺人や自殺等の事件が取りざたされ、「命の大切さ」に対する意識が薄れていることが懸念されている。斎藤ら(2002)は「一人一人の命のかけがえのなさを尊重し他者への労りを表現できる原点は、自分自身の存在価値や愛情に対する信頼にある」(斎藤ら, 2002, p.215)と述べている。生命誕生のすばらしさを知ることによって、自分自身を見つめ直し、自分の「命の大切さ」を知ることが、自己肯定感を高め自尊感情をもつことにつながると考える。さらに自分の存在が家族の愛情によって支えられていることに気づかせ、自らも家族や周囲の人たちへ愛情をもつことにつながる。

筆本ら(2004)は「日頃、出産の場に立ち会う助産師だからこそ、ひとつの生命誕生には両親や周囲の人たちの深い思いがあり、望まれて生まれてきたという事実を伝えることができる」(筆本ら, 2004, p.58)と述べている。今回の授業では、生命誕生の場に立ち会う助産師として生徒に対して臨場感のある現実やその感動を伝え、生命誕生のすばらしさを伝えられたのではないかと。助産師はその専門性を生かした性教育によって、生徒に自らの誕生や成長過程に目を向けさせ、愛情に包まれてきた歳月を辿ることで自身のかけがえのなさを実感させる役割があると考えられる。今回、1回の講義ではあるが、生徒が自身の命のみならず他者の命の尊重へとつながる道筋を示すことができたのではないかと考えられる。

C. 研究の限界と今後の課題

近年、全国において助産師による性教育の取り組みが広がりつつある。今回、市の思春期健康教育事業として性教育授業の充実のために助産師講話の依頼が当院に寄せられ、施設助産師が学校に出向き講話を行った。これは当院でも初めてで、市としても初めての試みであった。戸井田ら(2006)は中学校教諭に対する

性教育意識調査において「教諭の97%が中学生の性教育の授業に専門職の協力が必要であると答えている」(戸井田ら, 2006, p.99)としている。しかし、今回性教育の希望があった中学校は市内で1校だけであった。その背景として、必要性を感じていながらも余裕のない授業枠や性教育バッシング等により、専門職の介入に対して積極的に取り組むことが困難な現状があると考えられる。命の大切さについての性教育は、助産師だけが伝えられるというものではない。実際には、学校内での性教育は教員が担当していることが多い。しかし、前述したように、生命誕生の場にいる助産師が学校に出向いて介入してほしいという教員の声は多いのが現状であり、性教育への助産師の介入が必要とされているとわかる。だからこそ、依頼にいつでも応えられるように、助産師として臨場感あふれる授業をいつでも提供できるような体制作りが重要である。

今回の授業枠は1コマだけであった。マイナスイメージをもった生徒に対するフォローは、1回の授業内で行うことは困難であり、今回の研究の限界であると感じられた。今後も助産師が学校に出向いて性教育に介入し、より効果的で充実した性教育の継続を実現するためには、学校で生徒と毎日接している学校教諭だからこそできる密なフォロー、行政にいる保健師だからこそできる行政への働きかけや調整、一番身近な存在である保護者の理解と家庭内でのフォロー、これらが連携していくことが今必要とされている。

また、性差による具体的な性教育の受け止め方の違いに関しては先行研究が少なかつたため、今後の性教育実践の際には性差も考慮して検討したい。今回は与えられた授業の時間枠や対象人数などの関係で、講義形式となったが、より効果的な性教育のためには、授業形態や媒体、方法などについてさらに検討していく必要がある。

VIII. 結論

今回行った性教育により、生徒は生命誕生のすばらしさを知り、自分自身を見つめ直すことができる機会となった。自分の「命の大切さ」を知ることによって、自己肯定感を高め、さらに自分自身だけでなく家族や周囲の命をかけがえのないものと実感できた。生徒が自身の命のみならず他者の命の尊重へとつながる道筋を示すことができ、このことから、助産師が行う性教育により、中学生が自分自身および家族や周囲の命をかけがえのないものととらえ、「命の大切さ」に対する意識が高まったといえる。

文献

筆本静枝・田中敬子・前原英子ほか (2004). 助産師による性教育授業の有効性の検討～「命の大切さ」に焦点をあてて～. チャイルドヘルス, 7 (8), 55-59.

森 恵美 (2004). 母性看護学概論. pp.150-151, 東京, 医学書院.

斎藤美貴・有森直子・片桐麻州美ほか (2002). 助産

婦による「命の誕生に関する授業」の評価. 日本助産学会誌, 15(3), 214-215.

戸井田綾子・郷道順子 (2006). 中学校教諭に対する性教育意識調査—地域助産師に求められている性教育の役割とは何か—. 母性看護, 37, 98-100.

財団法人厚生統計協会 (2005). 国民衛生の動向・厚生
生の指標, 52(9), 94.